

〔個人研究〕

『俱舎論』から見た仏陀

石 田 一 裕

1. 序

トポロジーという数学の一分野がある。この分野においては、コーヒーカップとドーナツが同じ形として扱われる。コーヒーカップとドーナツは、日常生活においては全く異なる代物である。我々はドーナツでコーヒーを飲むことはできない。しかし、学問の分野にこれを移行させれば、この二つを同じ種類のものとしてみる観点が確保されうる。そして、そのような観点のもと矛盾なく厳密な論理体系が構築されるのである。

これは本稿を始めるにあたっての比喻であるが、もう一つ例を挙げよう。私の前に10枚のカードがあり、これには1から10までの数が書かれている。そして「この10枚のカードを二つのグループに分けなさい」という問題が出される。私は、例えばこれらを偶数と奇数に分類し、あるいは5以下と6以上に分類し、あるいは素数と素数でないものに分類する。問題はただ「二つのグループに分類せよ」というものであるから、それぞれが正解である。私はこの問題に対して様々な立ち位置を取ることが可能であり、そしてその立ち位置の取り方によって答えも変化するが、どれもが正解になりうる。

さて、私は「仏教とは何か」という問や、「仏陀とはいかなる人物か」という問いもこの種のものであると考えている。これらの問に対する答えは研究者の立ち位置によって変化するのであるが、各研究者が厳密な論理体系に則って導いた答であれば、それぞれが正解といえるであろう。本稿はこのような考えのもと、仏陀についての私の研究姿勢を提示し、さらにそれに基づいた具体的な考察を試みる。

2. 先行研究について

2-1. 平岡氏の指摘

私の考えと、その具体的な考察を提示するに当たり、先行研究の批判を本稿の導入としよう。ここでまず取り上げるのは平岡〔2010〕である。この論文において、平岡氏は仏教学にとって有益な方法論を提示した。平岡氏は仏陀を「歴史を作ったブッダ」と「歴史が作ったブッダ」に分類し、前者の研究価値を十分に認めながら、しかし後者の研究意義を主張する。これについて平岡氏の立場を示す一文を紹介しよう。

しかし私は「歴史を作ったブッダ」像の究明のみを以てよしとする立場には立たない。今日まで仏教が生き残ってきた背景には、後代の仏教徒が自分たちの理解や解釈に基づきながらではあるが、脈々と教祖ブッダの姿を伝えてきた事実があり、これなしに仏教は生きた宗教として今日まで生き残れなかったであろう。この意味において、「歴史を作ったブッダ」と「歴史が作ったブッダ」とは等価であると言える。「歴史を作ったブッダ」なしに「歴史が作ったブッダ」は存在し得ないし、逆に「歴史が作ったブッダ」なしに「歴史を作ったブッダ」は理解し得ないからである。¹

さらに平岡氏はこの後に「歴史が作ったブッダ」の研究を「仏教研究の重要な役目」と述べている。平岡氏が、「歴史が作ったブッダ」の研究が「歴史的ブッダ＝歴史を作ったブッダ」の解明に十分に寄与することを指摘した点、さらにこの二つのブッダが等価であることを示した点を私は高く評価する。もちろん、これまでも仏伝研究の重要性は指摘されてきたところだが、平岡氏の主張の重要性は、歴史的仏陀についての研究と仏伝の研究とが密接に関係しつつも、線引きできることを示した点にある。二つの研究は深く関連するものであるが、異なる観点に立脚した研究である。それゆえ、同様に仏陀についての研究であっても異なる結論にいたる可能性がある。しかしながら、それらの結論が厳密な学問体系によって導かれたものであれば、決し

て間違いではない。仏陀を眺める観点が異なれば、その目に映る仏陀の姿も異なったものとなるであろう。

このような平岡氏の研究について、私がわずかに批判したい点は、「歴史を作ったブッダ」に対する研究についての配慮である。平岡氏は歴史的仏陀の解明が容易いものではないことを指摘するが、それ以上のことは言及していない。これについて中村元『ゴータマ・ブッダ』Ⅰの以下の記述を紹介したい。

そもそも歴史的人物をあるがままに伝えるなどということは、近代においても不可能である。かならずや伝える人の評価・批判が加わっている。ましてはほぼ二千五百年といわれる歴史的宗教的偉人に関してはなおさらである。²

中村氏は自身が用いた文献のパッチワーク的な手法の限界を、自分自身で端的に指摘している。また、この直前には、自身が明らかにしうることについて「歴史的人物としてのゴータマ・ブッダのすがたに近いものを構成することができるのではなからうか」と述べている。中村氏のこの主張はもっともなことであり、文献学的な手法を用いて現存文献の最古層を定め、そこから仏陀のイメージを再構成しようとする研究者であれば、みなが抱えているジレンマであろう。

私は「歴史的仏陀＝歴史的人物として実在した仏陀」を認めないわけではないが、それは文献あるいは考古学的資料を通して再構成されたものでしかないと考えている。そもそも文献抜きに我々は仏陀が実在したと述べることはできず、文献に説かれる仏陀の記述から、仏陀の実在を推測するのである。仏陀に関するあらゆる経典や遺物が、壮大なフィクションを構成している可能性は、どこまでいっても否定できない。もちろんその内部にいればそれは真実であり、一つの小説がある世界観をともっているようなものであるから問題はないであろう。しかし、そこを飛び出してみたときにそれを事実とする根拠はどこにあるだろうか。

逆説的に聞こえるかもしれないが、仏陀が存在したから文献が現存しているのではない。文献が現存しているから、仏陀は想定されるのである。これは平岡氏が「『歴史が作ったブッダ』なしに『歴史を作ったブッダ』は理解し得ない」ということと同義である。それゆえ、「様々な文献から再構成される仏陀」と「仏陀を説く文献」との価値は等しいものである。また、今述べたところの「様々な文献」を「最古層の文献」と置き換えた時に、そこから再構成される仏陀が、歴史的仏陀として想定されるものである。これは、歴史的仏陀が文献から再構成されたイメージであることのみを、意味するものである。そして、この視点において歴史的仏陀の実在を担保するものはない。

2-2. 下田氏の指摘

私は「歴史的仏陀」を否定しているのではない。私は文献学によって明らかにされた仏典の最古層を認めるし、またそこに基づいて仏陀を再構成する手法や、その成果もまた大いに認める。しかし、そのような仏陀がそのまま歴史的仏陀であるとはみなさない。また最古層の文献から再構成される仏陀と、より後代の文献から再構成される仏陀の価値を比較することに大きな価値を見出さない。最古層の文献における仏陀を「歴史的人物としてのゴータマ・ブッダのすがたに近いもの」と想定することは可能であろうが、そのような仏陀像をそのまま歴史的仏陀とみなす担保は何もない。また様々な文献から再構成される仏陀の価値を定めるための評価基準は絶対的なものではない。

私のこのような考えと軌を一にするのが下田〔2005〕である。下田氏は「歴史的ブッダ」についての研究の限界を鋭く指摘している。

十九世紀にはじまるヨーロッパの仏教研究は、一方で〈歴史的ブッダの発見〉に端を発するにもかかわらず、他方では同時にブッダの実在をめぐる論争を二〇世紀の半ばまで、それも有力な研究者たちのあいだでつづけてきた。ヨーロッパの仏教学会に底流したこのあい反する研究の

傾向は、現存する仏教資料からいかにして歴史的な事実を再現するかという問題をかんがえるうえできわめて重要である。博覧強記をほこる中村元の『ゴータマ・ブッダ』が、ことこの〈歴史的ブッダ実在論争〉にかぎって言及していないのは謎である。³

下田氏は仏教学の成立を西洋の黎明期を視野に収めつつ、ゴータマ・ブッダの実在をめぐる論争を紹介している。また歴史的仏陀を問うことの意味や、さらには仏教学の在り方を論じる。また下田氏は問題提起として、仏教研究を三宝によって捉える視点から、仏陀を研究することと、教理や教団を研究することとの差異を述べ、中村元『ゴータマ・ブッダ』について若干の批判を行なっている。私は仏教研究を三宝に分類する下田氏の発想を評価しつつ、しかし「仏宝」の特殊である点を述べておきたい。

当然のことであるが、仏宝なしの法宝や僧宝はありえない。仏宝は、法宝・僧宝のよりどころである。より正確には、仏陀の誕生を以て法が説示される可能性が開かれ、その後、僧伽が成立していく。それゆえ、仏陀の誕生は仏教史における特異点といえよう。

私には『律蔵』大品が仏陀の成道から記述を始める点はそれを物語っているように思われ、また『四分律』受戒捷度之一において記される、二商人が仏と法とへの二帰依によって優婆塞になったという記述もまた同様であると感じられる。『四分律』における二商人帰依の逸話において、釈尊は教えらしい教えを語ってはいない。ここにおいて、二商人は仏陀を通して法に帰依した、と我々は解釈することが出来る。ここで私が述べたいことは、まず僧宝なしの仏宝・法宝を想定することが可能であるということであり、次に仏宝を通してしか法宝は理解されえないと思われることである。仏陀の誕生—大品でいえば第一の記述であり、『四分律』三一では菩薩が如来となった間の出来事—は、仏教史における一つのクライマックスであるとともに、仏教がはじまる起源でもある。それを承認すること、すなわち仏陀の存在を信じることが、仏教徒になるための第一要件であり、それゆえ仏宝は三宝の第一を占めるのではなからうか。この仏陀について、歴史的実在であるか、そう

でないかを問う必要はなく、この仏陀はただ帰依の対象である。この意味において、中村元『ゴータマ・ブッダ』は仏教書である。中村氏は仏陀の存在を信じることから研究を始めたと考えれば、「〈歴史的ブッダ実在論争〉にかぎって言及していない」点は、帰依の領域であったということで解決される。換言すれば、中村氏にとって歴史的仏陀が実在するというのはいつの作業仮説であり、研究の前提である、と我々は理解することが可能である。そして、その作業仮説、あるいは研究の前提は否定の余地がないものだったのだろう。下田氏は、おそらく、そのような研究の態度自体を批判しているのであろうが、今後そのような批判を土台に下田氏から新たな仏陀像がどのように提出されるかが期待される。

2-3. 佐々木氏の指摘と先行研究のまとめ

さて、歴史的仏陀の実在について最後に佐々木 [2004] に触れておこう。佐々木氏は以下のように述べる。

釈迦は実在の人物であったか。これだって、仏教学者はみんなお釈迦さんは実在の人だって思っているけれど、証拠なんかないですよ。(中略) 私も十中八九いたと思うんですけどもね。でも、残りの一がある以上は、これはやっぱり心の片隅にこういう疑問をとどめておくと、いつの日かこれまた大きく花開くこともあるかもしれない、というわけです。⁴

佐々木氏のこの発言は、仏教学のジレンマを端的に述べている。仏教学者が仏陀の実在をいくら想定しても、それを証明することは非常に困難である。しかし、これは学問的な疑問として常に抱くべきものである。

仏陀のイメージがそれを記述する人によって大きく異なりうるのは、もちろんブッダに言及する様々なテキストの中で、何を研究の対象としたかに起因するものであろうが、仏陀の実在の担保が研究者それぞれの信に据えられていることにも関係することであろう。要するに、研究者各自の信の在り方によって描かれる仏陀が異なってくる、という可能性がある。

我々は「歴史を作ったブッダ」と「歴史が作ったブッダ」を研究することが可能であるが、そのような我々の営みは「歴史が作ったブッダ」の内容を増幅させていくのであろう。仏陀を記述することについての困難は、自身の研究対象である仏陀が、研究の進展とともに変化してしまう点にあると考えることが出来よう。

3. 問題提起

先行研究の紹介と批判を行なったうえで問題を提起したい。

仏陀を研究する方法や視点にはいくつかのものがあろう。文献によって研究することも可能であれば、現代において仏陀がどのように信仰されているかを研究することもできるであろう。そして、それぞれの視点から厳密な方法に基づいて描き出された仏陀は、どれもが間違いではない。序に述べたが「1 から 10 までの数を分類しなさい」という問には、様々な答が存在する。「仏陀とは何か」という問にも、同様に様々な答が存在し得る。それゆえ、仏陀を研究しようと試みるのであれば、まずは研究の起点となる問をしっかりと立てねばならない。「1 から 10 までの数を分類しなさい」という問を「1 から 10 までの数を奇数と偶数に分類しなさい」とするだけで、正解は一つに限定される。

「仏陀とは何か」と問うとき、それを「歴史的仏陀とは何か」と理解する人は、歴史的仏陀の実在をひとまず無条件で受け入れ前提としたうえで、文献学によって仏典の最古層を定め、それに基づいて歴史的な仏陀を再構成しようと試みるであろう。また、それを「仏典に語られる仏陀とは何か」と理解する人は、あるいは阿含を研究範囲として、あるいは大乘經典を研究範囲として、仏陀が如何に説かれているかを読み解くであろう。また、それをたとえば「浄土宗における仏陀とは何か」あるいは「天台宗における仏陀とは何か」と理解する人は、それぞれの宗派の文献や教義に基づいた仏陀を明らかにするであろう。

問が異なれば、答も異なるのは当然である。そして、それらの答の価値を比較することはナンセンスである。たとえば仏典の最古層に基づいて再構成

された歴史的仏陀と浄土宗の教義によって理解される仏陀とを比べて、優劣をつけることには何の意味もない。

1 から 10 までの数を、奇数・偶数に分けた答と、素数・素数でないものに分けた答の価値は、ただ問に対してのみ定まる。この場合の価値とは正否である。もし問が「1 から 10 までの数を奇数・偶数に分類しなさい」というのであれば前者が正であり、後者が否である。もし問題が「1 から 10 までの数を素数・素数でないものに分類しなさい」というのであれば前者が否であり、後者が正である。答の価値は、問の在り方で決まっている。仏陀の描かれ方も、問の立て方によって異なってくるし、それに対してのみ答の価値は定まるのであるから、歴史的な実在と想定される仏陀が答として正である時もあれば、否である時もあるだろう。

さて、私はこのような状況を想定しつつ、「仏陀とは何か」ということについて、二つの問を提起したい。一つは「最も神話化された仏陀とは何か」というものであり、他方は「仏教徒によって受容された仏陀とは何か」というものである。

前者の問は、いわゆる歴史的仏陀と対比されるときに重要である。中村氏が『ゴータマ・ブッダ』I の序で述べるところであるが、歴史的仏陀を研究する際には、文献の最古層を拠り所として、それでもなお残る神話的要素を考古学的、地理学的、風土学的な資料や事実に基づいてはぎ取っていく必要がある。「文献にもとづくかぎり、神話的でないゴータマ・ブッダというものは得られない」と述べる中村氏にとって、もちろん「神話的」という評価は中村氏自身によって設定されたものであるが、これは当然の研究姿勢である。

しかしながら、その逆に仏陀がどのように神話化されたのかをはっきりさせること、すなわち仏陀がどのように仏典に描かれてきたかを明らかにすることは、非常に重要である。これを歴史的と称される仏陀と比較することは、仏典の作成に携わった仏教徒がどのように仏陀を理解してきたかを明かすことであり、あるいは仏教が様々な国に広まり、仏典が伝授されていることを考えると、仏典の神話化の在り方から、その作成者の思想、その仏典を標し

ている言語の特徴、仏典を生み出し保持する地理や風土の影響を考察することが出来るのではなかろうか。これについて石上 [1993] の言及に注目したい。石上氏は「経典にはインド古代人がそれなりに表現する文章の約束があったとみななければならないように思われる」⁵と述べるが、ここで語られていることは、先に紹介した平岡氏の研究姿勢と軌を一にするものであり、神話化された仏陀を研究することによって得られる知見について示唆するものである。私は、この種の研究の極点が最も神話化された仏陀を考え、明らかにすることであると思う。これは仏陀がどのように受容されてきたかを明らかにする点で重要であると同時に、仏教が伝播しテキストが作成された国の風土や、あるいはそこに暮らす人々の思想をつかむことにも貢献するものである。さらにこの間においては、神話や神話化の意味を考察する必要性も出て来るであろう。

このように「最も神話化された仏陀とは何か」という間に答えるためには、非常に広範な知識が必要であり、またこの間をねじ伏せる理論武装も必要である。これは現在の私の手におえるものではないが、今後の標的ではある。

さて、後者の「仏教徒によって受容された仏陀とは何か」という間について言及しよう。この間こそ、私が本稿で挑む間である。私は仏教徒を『俱舎論』に限定して、この間に答えようと思う。より正確に言えば、私は『俱舎論』の帰敬偈を本稿で考察し、そこから見える仏陀を描きたい。

「仏教徒によって受容された仏陀とは何か」という間は、常に具体的な問題として限定することが出来る。あるテキストにおいて仏陀がどのように規定されているか、あるいは特定の宗派に属する人々によって仏陀がどのように受容されているかを明らかにすることが、この間に答えていくことである。このような具体的な成果の総合が「仏教徒によって受容された仏陀とは何か」という間の答になるであろう。

私は「仏陀とは何か」という間をこのように限定して、研究を進めたい。この二つが本稿の提起する問題である。

4. 『俱舍論』 帰敬偈の考察

『俱舍論』には帰敬偈が存在するが、有部論書を見てみると、六足発智の七論では『法蘊足論』『識身足論』の二論、それ以降の論書では心論系の三論と『入阿毘達磨論』『五事毘婆沙論』などにみられる。帰敬偈はあらゆる論書に付されるわけではなく、世親に帰される論書でもたとえば『唯識三十頌』『唯識二十頌』には付されていない。

この帰敬偈において想定される仏陀を考察することが、ここでの目的である。下に『俱舍論』のテキストを引用してから、考察しよう。

AKBh.p.1、玄奘訳 p.1a、真諦訳 p.161c、和訳：和訳『界品・根品』 p.133
 yaḥsarvathāsarvahatāndhakāraḥsaṃsārapaṃkājjagadujjahāra/
 tasmaīnamaskṛtyayathārthaśāstreśāstraṃpravakṣyāmyabhidharmakośam//

諸一切種諸冥滅 拔衆生出生死泥 敬禮如是如理師 對法藏論我當說

一切種智滅諸冥 拔出衆生生死泥 頂禮大師如理教 對法俱舍我當說

凡そ、あらゆる仕方で、すべての〔心の〕闇を打ち破り、輪廻の泥から人々を抜き出しなされたかのまことの師〔仏陀〕に敬礼して、アビダルマ・コーシャなる論書を、私は説くであろう。

ここでは自利と利他との二つの仏陀の特性が説かれている。自利については、仏陀が闇を打破したとされる。闇 (andhakāra) とは、この後の長行によれば無知のことである。仏陀は無知を完全に離れている。声聞や独覚は染汚の無知は離れているが、不染汚の無知は離れていないので、仏陀とは異なる。仏陀の自利はこのように讃えられる。

次に利他についてであるが、仏陀が衆生を輪廻の泥から救ったと述べられる。長行では、仏陀は衆生を救済するに当たり神通力などではなく、教えの手を差し伸べることによって、輪廻という泥から衆生を救ったと讃えられる。

『俱舍論』の作者は、このような仏陀を如理の師（yathārthaśāstr）と捉え、この師に対して帰依を表明している。如理の師とは特に利他の在り方に着目したものであり、仏陀が如実に教えを説くことで利他を実践したことを表現したものである。

さて、ここに現れる仏陀のイメージについて考えてみよう。この仏陀は、いわゆる神話的な仏陀ではない。仏陀の特徴として言及されていることは自利と利他の二つである。前者は無知を打破したことを意味し、後者は教えによって衆生を救済したことを意味する。これは仏陀が完全な知者であることに重きを置いた理解といえよう。この後、アビダルマとは無垢の慧とそれに伴う法であると述べられるが、智慧に重きを置くアビダルマにおいては、仏陀はその完成者であり、かつその伝道者でなくてはならないのであろう。そのように仏陀を設定することで、智慧に基づいてテキストを作成する行為を、仏道実践とする視点が生まれるであろうし、自身の行為が仏陀の行為と重なることが意識でき、ある意味で『俱舍論』の作者は仏陀の行為を追体験した、と考えていたのではなかろうか。

さて『俱舍論』の作者は、このように仏陀を描き帰依をしているが、このような仏陀のイメージと我々が有する仏陀のイメージとに大きな違いが存在しているであろうか。

もちろん、後の業品では菩薩の在り方が言及されており、『俱舍論』において想定される仏陀は限りなく永いあいだの過去世の修業の末に成道した存在である。しかし帰敬偈において重視されるのは、そのような過去世の行ではない。仏陀を仏陀たらしめる二つの要素が帰敬偈において重視されるものであり、それは自利と捉えられる覚りであり、利他と捉えられる説法である。自ら覚りを開き、その境地から教えを説き衆生を救済したのが、帰敬偈においてイメージされている仏陀である。そして、このような仏陀は現在思い描かれる仏陀と通底するものがあるといえよう。

5. 仏陀の捉え方

仏陀は研究者の立ち位置によって、様々な現れ方をする。これは仏陀を描

くことが、その描き手自身を描くことに結びついているからであろう。神格化された仏陀を描いた描き手は仏陀に神性を見たであろうし、文献の古層に人間としての仏陀が描かれているのは、その描き手が仏陀にたぐいまれな人間性を見たからであろう。様々な經典の作成者は、それぞれが仏陀と向き合った結果を經典に描いていると考えることもできよう。また現存する仏教教団に所属する人々は、それぞれの伝統や教義を通して仏陀をイメージするかもしれない。

「仏陀とは何か」と問うのであれば、答としてはどれも間違いではない。これは1から10までの自然数を2グループに分けることと同じである。もし問を限定するのであれば、正解もおおのずと限定される。歴史的仏陀とは何かを問うのであれば、文献の古層に基づき、また考古学的な資料を活用してその実態に迫ることで回答を導くべきであろう。ある經典に描かれる仏陀とは何かを問うのであれば、經典を精読し、あるいは注釈書を参照するなどしてそこに描かれる仏陀を捉えればよい。

問を限定することで答も限定され、また答を導く方法論も定まってくるが、限定した問において導かれる答は限定されたものである。「仏陀とは何か」という問を限定することで導かれる仏陀は、その問によって限定された仏陀である。換言すれば、それは研究者が採用した立ち位置から描かれた仏陀の一面である。

このように考えると私が考察した『俱舍論』毘婆沙に現れる仏陀もまた、仏陀の一面であり、それは全体ではない。しかし、經論の作成者たちの立場からすれば、そのような仏陀が仏陀の全体であったのではなからうか。『俱舍論』の作者は仏陀の本質を、上に考察したように、覚りを開いた自利と説法によって衆生を救済した利他の二面によってとらえていたと考えられる。すなわち『俱舍論』において仏陀とは何かと問えば、答は端的に「自利利他円満した存在」となるであろうし、もう少し丁寧にいえば「無知を完全に打ち破り、教法の説示によって衆生を救済した存在」といえるであろう。

様々な經論に説かれる仏陀は、經論の作成者からすれば、完全な仏陀である。彼らは彼らの観点から、すなわち信仰の立場から仏陀を描こうとしてい

る。信仰を通して現前にいる仏陀を、経論の作成者たちは書き記したのであろう。そのように記された仏陀は、歴史的事実と呼ぶに相応しいものではなく、宗教的事実とでも呼ぶべき存在である。そして、私はあらゆる経論がそのような立場をとっていると考える。中村氏が仏典の最初期から仏陀が神格化されていることを指摘しているが、ひとまず仏陀の実在を認めて考えてみるに、仏陀は生身の肉体を以て活動していた時から、神格化されていたと想定することは十分に可能である。仏陀の神格化が在世の時にまで遡れるのであれば、それも一つの歴史的真実と呼ぶことが出来るであろう。それは同時に、仏陀は初めから宗教的事実であったということにもなる。

仏教学研究において仏陀を如何に捉えるかということは、仏陀が如何に捉えられたかを研究すること、平岡氏の言葉を借りていえば「歴史が作ったブッダ」を明らかにすることである。長い時間をかけ、また多くの地域に広がった仏教において、仏陀は様々に描かれてきた。研究においては、その中で、ある時代、ある地域、あるテキスト、ある人間といった特定の仏陀理解が対象となる。そのような「歴史が作ったブッダ」の個別事例が明らかになるにつれて、「仏陀とは何か」という疑問は大きくなるであろう。

その時にこの間に答えるためには、おそらく回答者は客観的な立場をとりえないであろう。その問への回答は、回答者が自身の観点から見た様々な仏陀のイメージに基づくものとなる。回答者の導き出した答は、彼自身にとっての完全な仏陀を意味する。しかし、それもまたいずれ別の観点から回答を導こうとする者にとって一つの「歴史が作ったブッダ」として理解され、他の完全な仏陀を導く一つの糧になるであろう。仏陀とは何かという問への答は、常に新しいものが古いものを飲み込むようなものではないか。ただし新しい仏陀のイメージが古いものを取り込み外延が広がることで、その内包が小さくなっていくことも考えられるのであるが。

6. 小結

『俱舍論』帰敬偈において想定される仏陀のイメージは、仏陀の在世から時間的に隔たったものであるが、さほどの神格化がなされていない。神格化

の有無は、時間的な経過だけによるものではないことには注意が必要である。むしろ仏陀が当初から宗教的実在であることを想定すれば、神格化自体は当然のことである。もちろん、歴史的実在としての仏陀について明らかにしようとする場合は、このような状況は好ましくないであろうが、「歴史が作ったブッダ」を明らかにしようとする場合には、さしたる問題ではない。

後者の立場において問題とされるのは、経論の作成者たちの思想である。

「歴史が作ったブッダ」は、その描き手に影響されるものであり、仏陀に対して描き手がいかなるイメージを持っていたかを明らかにすることが必要である。また、様々な仏陀のイメージの比較は、その描き手たちの思想の比較を可能にし、時代や地域が描き手に与える影響や、あるいはそれを超えて共通するものが明らかになって来るであろう。

また人間的に見える仏陀のイメージも、それはただ客観的な歴史事実を記述したものではなく、描き手の宗教的な満足を満たすものであった可能性があることに注意を払わねばならない。研究者の常識に基づいて、客観的であると判断が下されても、そのような仏陀の描き手にとっては、それが一つの神話化であった可能性を否定できない。『俱舎論』帰敬偈に説かれる仏陀は、智慧の完成者であり、かつその伝道者であると捉えられるが、そのような仏陀は『俱舎論』の作者、また広くはアビダルマに携わる者たちにとって理想の仏陀であったと考えられる。そのような仏陀を想定すれば、自身の行為を完全に肯定することができ、アビダルマに携わることを仏道の実践と理解できるのである。

「仏教徒によって受容された仏陀とは何か」を考察することは、このようにある仏陀像を描いた背景を探ることである。この視点はいずれ現代の研究者たちにも向けられるであろう。少なくとも西洋近代の仏教研究史を考察することは、西洋近代そのものを考察することと密接に結びついている。現代の客観的とされる仏教研究もいずれ研究の対象となり、日本現代そのものが持つ意味、価値を明らかにするための研究対象となるかもしれない。仏陀を研究し、それを描くことは、やはり研究者自身を描くことになることを忘れてはならない。

さて、私は仏陀がこれまでの想像以上に柔らかいものかもしれない、と考えている。トポロジーにおいて物体が穴の数で分類されるように、文献に説かれる様々な仏陀を分類する方法も、思いのほか多くあり、かつそのどれに依拠しても厳密な学問が展開できる可能性がある。そうであれば今、問われているのはどのような問を立てるかであろう。「仏陀とは何か」ということについて、より限定して問うこと、それによって外延を削り内包を深めていくことが可能となる。また限定された問から導き出される様々な仏陀を眺めるための、一つの観点を提唱することも今後の課題であろう。それによって、現代における完全な仏陀を見出す可能性が生じてくるのだから。

略号・参考文献

石上 [1993]・・・『仏所行讃』（仏典講座5、大蔵出版）

佐々木 [2004]・・・「インド仏教史の新たな視点—現代仏教学にパラダイムシフトは可能か—」（『駒澤短期大学仏教論集』第10号、駒澤短期大学仏教科）

下田 [2005]・・・「〈物語られるブッダ〉の復活—歴史学としての仏教学を再考する—」（長崎法潤博士古稀記念論集刊行会編『仏教とジャイナ教：長崎法潤博士古稀記念論集』、平楽寺書店）

中村元『ゴータマ・ブッダ』Ⅰ（中村元選集〔決定版〕大11巻、春秋社、1992）

平岡 [2010]・・・「仏伝からみえる世界」（『新アジア仏教史03 インドⅢ 仏典からみた仏教世界』、佼成出版）

¹ 平岡 [2010]、p.60

² 中村元『ゴータマ・ブッダ』Ⅰ、pp.10-11

³ 下田 [2005]、pp.360-361

⁴ 佐々木 [2004]、pp.14-15

⁵ 石上 [1993]、p.14